現場を改善する研究をめざして

2007年度、わが国において、食品メーカーにおけるさまざまな偽装や毒物混入、製紙業界の古紙混合率の偽装、ＮＨＫ記者の株不正売買、一般市民を巻き込む銃撃事件、子どもが親を殺害する事件、名ばかりの管理職処遇など、私たちの日常生活を脅かす諸問題が溢れている。

本号の特集のテーマは「アクションリサーチ（実践研究）」である。私ども人間関係研究センターの活動の中心的な柱に「ラボラトリー方式の体験学習」、「Ｔグループ」、「アクションリサーチ」などをあげている。これらの概念を生み出した研究者は、Ｋ．レヴィンである。

彼は、社会心理学の領域の研究にグループダイナミックス（集団力学）を創出し、集団の力の研究、一人一人の可能性を引き出すためにはメンバー相互作用を含めたティームの基礎的な研究から目の前の社会の諸問題の解決に立ち向かうための応用研究まで幅広く行っている。現場の諸問題の改善や解決をめざしたフィールド尊重の研究がアクションリサーチである。「よい理論ほど実際に役に立つものはない」という彼の有名な言葉があるように、現場を大切にしていたといえる。

Ｇ．オルポートは、レヴィンが成し遂げた人間の科学的な研究は「革命」であるとまで述べている。また、レヴィンの生涯を著書にまとめたＡ．Ｊ．マロウは、レヴィンを学者であると同時に人道主義者として科学的な考え方を取り入れた人物であると評している。まさに彼の研究は、産業界、教育界、育児から都市計画まで行政にと、さまざまなフィールドに影響を与える仕事をしている。

かれは社会心理学をそのあらゆる面で新しい方向に向けかえ、人間関係の心理学的な研究にさらに精密な、とはいえ人間性に富んだ方法を与えてきたのである。マロウは、レヴィンの研究の目的は「ひとはどうして彼らのなすように行動するのかについてもっと深い説明を求め、よりよく行動するにはどう学んだらよいのかを知る」ことであると述べている。

レヴィンの研究史ふりかえると、私たち人間関係研究センターの使命は、いかに現代社会の諸問題に関して人間関係の視点から解明できるのか、また、その問題解決に向けてさらによりよく行動するために何を学ぶ必要があるかを探求することであるといえるのではないだろうか。今、あらためて本号の特集「アクションリサーチ」を取り上げることによって、私たちが本来進むべき道は何であるのか、温故知新ではないが、レヴィンに学び、先に述べたような現在私たちが抱える諸問題の現場に飛び込み、その現象の解明と改善のための研究活動をしなければならないことに目覚めさせてもらったといえるだろう。

特集の中での、アクションリサーチの研究方法の再考、そして学校教育現場の改善のための実践研究などを基盤にしながら、学校教育はもちろんのこと、食生活、経営管理などに潜むの諸問題改善に向けた研究を行っていくことが大切になるだろう。

南山大学人間関係研究センター長　**津　村　俊　充**